

平成23年度宮古群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	30	30
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	30	30

(平成23年12月23日付沖縄气象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	18.0	20.4	16.0	130.8	86.4

(沖縄气象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 1月の発生予報および防除上の注意事項

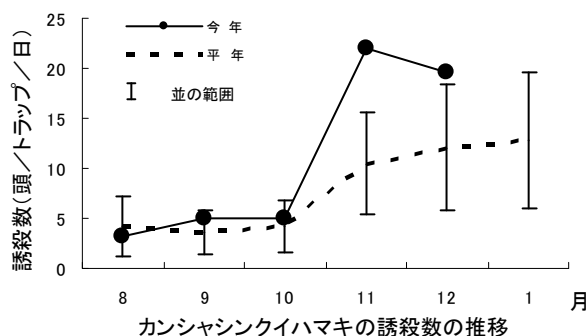
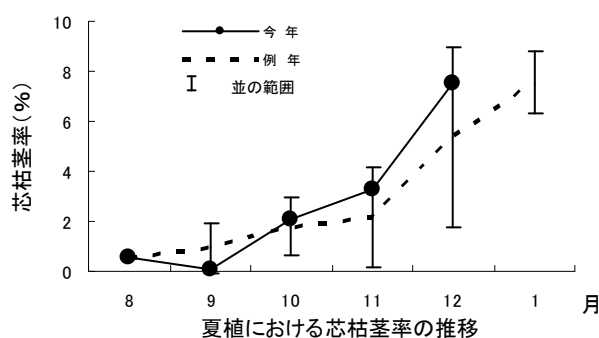
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 12月中旬から下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は、7.5%(前年0.7%、例年5.3%)と例年よりやや高かった。また、一部圃場で多発していた。
- b 12月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモンによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は、19.6頭(前年15.7頭、平年12.1頭)と平年よりやや多かった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため除去する。
- c 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、食入初期の防除を徹底する。
- d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
- e 平成23年度病害虫発生予察注意報第2号(平成23年12月28日付)参照。

○ コガネムシ類幼虫(アオドウガネ・ケブカアカチャコガネ)の防除対策

- a 12月下旬の掘り取り調査の結果、アオドウガネの株当たり幼虫数は0.1頭(前年0.2頭、平年1.2頭)と平年よりやや少なく、ケブカアカチャコガネの株当たり幼虫数は1.2頭(前年1.2頭)であった。
- b 立枯れがみられる圃場から早期に収穫し、収穫後は速やかに耕耘して、幼虫密度の低減を図る。

2 マンゴー

- 炭疽病、軸腐病およびかいよう病の防除対策
 - a 12月中旬の調査の結果、一部の施設で炭疽病の発生がみられた。
 - b 不要な新梢や罹病枝や葉は発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
 - c 着果後の被害軽減のため、この時期からの予防防除に努める。
 - d 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。
- ハダニ類の防除対策
 - a 12月下旬の調査の結果、葉当たり雌成虫数は0.1頭(前年0.8頭、平年0.5頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 多発すると防除が困難になるため、早期発見・早期防除に努める。
 - c 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。

3 かぼちゃ

- 細菌性病害の防除対策
 - a 強風による傷や降雨は、斑点細菌病や葉柄腐敗症などの発生を助長する。
 - b 防風垣は次期作まで残し、予防散布と初期防除に努める。
- うどんこ病の防除対策
 - a 12月下旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は69.5%(前年3.0%)、発病度は27.4(前年0.8)であった。
 - b 着果前後には、発生源となる株元の不要な下葉を除去し、透光通風をよくする。
 - c 着果期以降は、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので、防除を徹底する。

4 にがうり(施設)

- うどんこ病の防除対策
 - a 12月中旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は24.6%(前年5.8%)、発病度は6.5(前年1.9)であった。
 - b 株元の不要な下葉や被害葉は除去し、生育に応じて古葉などを摘葉して、透光通風をよくする。
 - c 摘葉残渣は、ビニール袋に入れるなどして施設外へ持ち出し処分する。